昭和女子大学現代教育研究所紀要　第5号　75～78（2019.12）

《実践報告》

教育研究公開セミナー（現代教育研究所オープンラボ）「対話する学校～持続可能な研修と知の形成について～」

友野　清文（現代教育研究所所員　総合教育センター）

はじめに

現代教育研究所は開設以来、それまでの大学院人間教育学専攻主催のフォーラムを引き継ぐ形で、年一度のフォーラム（昨年度からは「オープンラボ」）を2月に開催してきた。

今年度はこの枠の中で、教育研究公開セミナー「対話する学校～持続可能な研修と知の形成について～」を、本研究所・国立大学法人奈良女子大学附属中等教育学校・私立岩倉高等学校（東京）の三者の連携により、2019年8月25日（日）14時～17時に実施した（一般財団法人日本私学教育研究所の後援を得た）。

これまでフォーラム（オープンラボ）は、研究所全体で取り組んできたテーマや、研究グループでの活動を踏まえて行ってきたが、今回は主に私学教育研究グループがこれまで取り組んできた私学の教育育成に関わる内容であった。ここでは公開セミナーに至る背景とその概要、そして今後への展望・課題を述べる。

1　公開セミナー開催の背景

今回のセミナーは上に述べたように、本研究所・奈良女子大学附属中等教育学校・私立岩倉高等学校の連携協力によって実施された（形式上は、研究所が「主催」、二校が「協力」となっているが、内容に関わる準備・運営は主に岩倉高校が担当した）。

セミナー実施にあたっては、三者各々のこれまでの活動・取り組みがあった。

先ず本研究所は2014年11月に発足し、所員(学園内の教員）と研究員（学外から公募）が、いくつかの研究グループを編成しており、私学教育研究グループはその一つである。これまで私学教育に関わる研究や調査を行ってきたが、そのテーマの一つが私学教員の研修である。2016年には、東京都内私立学校を対象として教員研修についてのアンケートや聞き取りを実施した[1]。この私学教育研究グループに研究員として、岩倉高等学校の松本祐也教諭が当初から関わっていた。

次に岩倉高等学校は独自の校内研修の取り組みを進めており、アンケートに際しては聞き取りも行った。20歳代の若い先生が多く、校内研修では、若手教員が中心となって企画・実施をしてきた。そしてこの成果によって、2018年度、独立行政法人教職員支援機構（NITS）の第2回NITS大賞の校内研修部門で優秀賞を獲得した（受賞した学校等の中で唯一の私学であった）。

この受賞がきっかけとなり、奈良女子大学附属中等教育学校との連携が実現した。同校は数年前から「教育実践交流ラウンドテーブル」を実践してきた。これは、参加者（教員だけでなく企業人なども含む）を外部から募集してグループで対話を行うものである。同校が2019年8月22日に実施した「教育実践交流ラウンドテーブル」の案内では、ねらいが以下のように述べられている。

「ラウンドテーブル（Round Table）」は「円卓」を表し、転じて「少人数での話し合い」を意味します。参加者は4～6名で1つのテーブルを囲みます。まず、報告者が自らの実践について語ります。その語りに耳を傾けた後、じっくりと話し合うという流れで進んでいきます。語りと傾聴を繰り返す中で、報告者と参加者がともに理解を深めていくところにラウンドテーブルの特徴があります。

以上のような形で、三者の関係者が出会い、2019年春から実施に向けての具体的な動きを始めた。

2　公開セミナーの概要

（1）目的

以下は案内チラシで述べた「目的」である。

私立学校と国立学校とが協力し、対話を取り入れた持続可能な新しい研修スタイルを模索します。参加者のスキルアップにつながることを期待し、講義と演習（グループワーク）で、参加者同士で学ぶ機会を提供します。

「これからの教員に求められる学び」や「教員の学びのシステムをデザインすること」について一緒に学んでみませんか。／自分の手で納得できる研修をつくってみたいと思う方、これまでとは違う研修方法を検討してみたい方などにおすすめです。現職の教員のみならず、学校教育や人材育成に興味のある方の参加を広く募集します。ぜひご参加ください。

また研究所のブログでは以下のように掲載した。

現代教育研究所では、毎年フォーラムを開催してきました。一昨年度からは「オープンラボ」として、実践的なワークショップを行っています。／今年は、国立の奈良女子大学附属中等教育学校と私立の岩倉高等学校とのコラボにより、新しいスタイルの校内教員研修を模索します。／参加者同士が自らのことを語り合うことを通して、学び合い・高め合いの場とする研修のあり方を一緒に追求していきます。／学校関係者に限らず、広く学校教育や人材育成に関心のある方を募集します。

事前の打ち合わせでも議論したのは、校内研修を本当に教員にとって有益なものとすると同時に、できる限り負担の少ない形で継続できる（持続可能な）ものにするということであった。そしてそのためには、研修を受ける側を巻き込んで企画・運営・実施をすること（岩倉高等学校の実践）と、一方的な講義ではなく、じっくりと対話をすることで互いに学び合い、高め合うこと（奈良女子大学附属中等教育学校の実践）が必要なのではないかということであった。校内研修ではあるが、学校外の人をも巻き込んで行うこともできるのではないかという提起もなされた。

（2）準備の概要・参加者など

事前の打ち合わせは3回行った。最初は6月4日に岩倉高等学校で行い、テーマや内容の概要を検討した。その次は7月2日に本研究所で行い、事務担当者を交えて詳細な内容の検討、チラシなど告知の準備、当日に必要な物品の確認などを行った。そして最後は実施前日の8月24日に再度岩倉高等学校で行い、最終確認を行った。打ち合わせはこの3回だけであり、それ以外はメールを通して連絡を行った。

告知については、研究所のHPに加えて、全国国立大学附属学校連盟のHP、日本教育新聞の「情報掲

示版」（7月22日付）、東京書籍の東書Eネットの「研究会情報」、一般社団法人学習評価研究所（C.S.L）のサイト、Sensei Portalに情報を掲載した（これ以外にも複数の新聞社などに掲載・取材の依頼をしたが実現しなかった）。チラシ（図１）は都内の私立学校や関東近辺の国立大学附属学校、東京私学教育研究所などに送付した。

参加者の一般申し込みは28名であった。小中高の教員17名、企業・塾などの関係者６名、その他（私学団体職員・NPO法人運営者・大学教員・学生・当研究所研究員）５名である。年代では20歳代11名、30歳代８名、40歳代４名、50歳代以上５名であった。当日の欠席が４名あった。

図１　案内チラシ

（3）セミナーの概要

セミナーは基調講演とグループワークの２部構成で実施した。

基調講演は以下の２本であった（各30分）。

松井晋作氏　（桐蔭学園トランジションセンター　専任講師）

「高大接続を意識したSDGsの取り組み」

神徳圭二氏　（奈良女子大学附属中等教育学校　教諭）

「地域へ、そして全国へ～ラウンドテーブル型研修の試み～」

グループワークは岩倉高等学校の酒井徹教諭の趣旨説明に続き、各グループ（原則４名）で、事前に準備を求めていたテーマ（「コミュニティにおける自身の立場で大事にしている想い・実践していること」）についての話し合いを行った。グループ分けは事前に岩倉高等学校の担当者が行い、できるだけ多様な人が一緒になるようにした。また講演者２名もグループに参加した。

グループワークは各グループで一人がテーマについて話し、それについて意見を出し合う形であった。一人の持ち時間は15分とした。事前の資料を準備してきた参加者もおり、職場などでの取り組みや課題、悩みについて語り合われた。

その後グループでの振り返り、全体での振り返りをした。最後に今回のセミナーのキーワードとして、多様性（diversity）・対話（dialog）・協働（collaboration）があることを確認した。

3　今後への展望と課題

今回のセミナーは、当研究所と国立大学附属学校と私立学校の協力によって実施した。教員研修について、これまで独自の取り組みを行ってきた２校の蓄積を重ね合わせることで相乗効果があったと考えられる。全体としては成功であったと言えよう。

今回を第一歩として、三者の協力関係を維持し、可能であれば定例化することを考えている。何度か行うことで、明らかになってくる課題もあると思われるが、現時点での内容面での課題は以下の通りである。

１テーマ設定について

今回のようなテーマは、ある意味で漠然としており、自由に話し合えるメリットはあるが、最終

的に何を学び考えたのかがはっきりしない面もある。テーマ・課題設定に工夫が求められる。

２グループワークの方法について

今回のセミナーの企画を始めた段階では、奈良女子大学附属中等教育学校から、これまでの実践を踏まえた様々な形式が紹介され、当初は「ワールドカフェ」形式を考えていた。実際には別の形となったが、ワークの方法（形式）について、より学ぶ必要があると考える。

３「研修」の意義について

そもそも研修とは何であろうか。教員に求められる能力・資質はどのようなものであり、それをどのような形で高めていくことができるのか、という基本的な問題を常に考えていく必要があるのではないか。

以上は内容面の課題であるが、他方で運営・実施にあたっての課題もある。今回は新年度になってから提案されたため、研究所の閉所期間中の実施となった。やむを得ない側面もあるが、今後は年間予定の中に位置づけて、計画的に行う。また、私学教育研究グループが中心となって行うものではあっても、研究所全体の取り組みであることを関係者に一層周知することも必要である。これは他のグループの活動についても同様に言えることである。

おわりに

今回の公開セミナーは、何よりも神徳圭二先生（奈良女子大学附属中等教育学校）と松本祐也先生（岩倉高等学校・本研究所研究員）のお力によるものであった。また松井晋作先生（桐蔭学園トランジションセンター）には、直前になって講演のご依頼をすることになったがご快諾いただけた。

岩倉高等学校の酒井徹先生と鈴木将司先生には、事前の準備と当日の進行を実質的に担っていただいた。また同校の今井英雄先生、宮原彩先生、高橋澪先生、田中聡一先生には当日の運営にご協力いただいた。

本研究所の研究員の原匠先生と野口大輔先生にも様々な面でご協力いただいた。

これらの方々に心からお礼を申し上げたい。

最後に研究所の吉川啓子次長と長谷川恵理子さんには、急な企画であったにもかかわらず、関係者との連絡、チラシ作成、ブログやHPでの告知準備、申し込み受付、文書作成、物品と茶菓の購入、当日使用する文房具や機材の準備などを行って頂いた。お二人の働きがなければ実施できないものであった。この場を借りてお礼を申し上げる。

後注

1　私学教育研究グループ（2017）「私学における教員研修について―東京都内私立高等学校へのアンケート調査の結果から―」『昭和女子大学現代教育研究所紀要』第３号、p.145-149.